

【旧約聖書日課】エゼキエル書 37章1～14節

¹主の手がわたしの上に臨んだ。わたしは主の霊によって連れ出され、ある谷の真ん中に降ろされた。そこは骨でいっぱいであった。²主はわたしに、その周囲を歩き巡らせた。見ると、谷の上には非常に多くの骨があり、また見ると、それらは甚だしく枯れていた。³そのとき、主はわたしに言われた。「人の子よ、これらの骨は生き返ることができるか。」わたしは答えた。「主なる神よ、あなたのみがご存じです。」⁴そこで、主はわたしに言われた。「これらの骨に向かって預言し、彼らに言いなさい。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。⁵これらの骨に向かって、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。⁶わたしは、お前たちの上に筋をおき、肉を付け、皮膚で覆い、霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。そして、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。」

⁷わたしは命じられたように預言した。わたしが預言していると、音がした。見よ、カタカタと音を立てて、骨と骨とが近づいた。⁸わたしが見ていると、見よ、それらの骨の上に筋と肉が生じ、皮膚がその上をすっかり覆った。しかし、その中に霊はなかった。⁹主はわたしに言われた。「霊に預言せよ。人の子よ、預言して霊に言いなさい。主なる神はこう言われる。霊よ、四方から吹き来れ。霊よ、これらの殺されたものの上に吹きつけよ。そうすれば彼らは生き返る。」

¹⁰わたしは命じられたように預言した。すると、霊が彼らの中に入り、彼らは生き返って自分の足で立った。彼らは非常に大きな集団となった。

¹¹主はわたしに言われた。「人の子よ、これらの骨はイスラエルの全家である。彼らは言っている。『我々の骨は枯れた。我々の望みはうせ、我々は滅びる』と。¹²それゆえ、預言して彼らに語りなさい。主なる神はこう言われる。わたしはお前たちの墓を聞く。わが民よ、わたしはお前たちを墓から引き上げ、イスラエルの地へ連れて行く。¹³わたしが墓を開いて、お前たちを墓から引き上げるとき、わが民よ、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。¹⁴また、わたしがお前たちの中に霊を吹き込むと、お前たちは生きる。わたしはお前たちを自分の土地に住ませる。そのとき、お前たちは主であるわたしがこれを語り、行ったことを知るようになる」と主は言われる。

【使徒書日課】使徒言行録 2章1～11節

1五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、2突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。3そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。4すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

5さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、6この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。7人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。8どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。9わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、10フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、11ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もあり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞くとは。」

《炎のような舌》【こども説教のために】

ペンテコステおめでどうございます。今日、教会に集められたわたしたちは、一人ひとり「赤」を身に着けて、互いに聖霊に満たされた者たちであることを喜び祝おうとしています。

ご復活から五十日目。天に昇られた主イエスのお約束を信じて、弟子たちは一つ所に集まっていました。約束の聖霊が降るのを待って、心を合わせて熱心に祈っていた（使徒 1:14）のです。ところが、突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ…家中に響いたのです。祈っていた彼らは、驚いたことでしょう。目を上げ、辺りを見回したに違いありません。目に入ってきたのは、不思議な光景でした。真っ赤な炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまっていたのです。それは、一人ひとりに神の偉大な業を語らせる舌でした。お互いが炎のような舌で神の偉大な業を語る姿を見て、彼らは、皆が約束の聖霊に満たされていることを信じたのです。

「赤」のしるしを身に着けて集まったわたしたちも、皆が約束の聖霊に満たされていることを信じています。皆が神の偉大な業を語ることのできる炎のような舌を与えられていることを知っています。

聖霊の風は、天から吹いています。聖霊を受け入れましょう。互いを神の御業を語ってくれる友として、その言葉に耳を傾けましょう。

自分の言葉で…

今日のペンテコステの祝いに合わせて、今年も有志が手作りの「鳩クッキー」を用意してくださっています。コロナ禍で中断したこともありましたが、八年前のペンテコステから、祝いに集められた皆さんに「鳩クッキー」を配るのが恒例になりました。同じ八年前のペンテコステから始まったのが、今日も準備してくださっている「コーヒータム」です。「鳩クッキー」と「コーヒータム」。礼拝に集められた皆さんが、互いに挨拶を交わし、自分の言葉で語り合う交わりの際は、ペンテコステの祝いの中から始められたのです。わたしは、ひとり密かに、八年前のペンテコステが石神井教会にとっての「第二のペンテコステ」だったと考えてきました。

最初のペンテコステの日、弟子たちは、すでに一つになって集まっています。天に昇られた主イエスを見届けた弟子たちは、ガリラヤから旅を共にしてきた仲間同士として、なお行動を共にしていたのです。その数は、百二十人ほどだったと言います。

その日は、ユダヤの祭りである「五旬祭」＝「七週祭」の初日だったようです。エルサレムの町には、あちらこちらに、各地から巡礼団を組んできた者たちの宿があったことでしょう。祭りの祝われる中、同郷の者同士、日常生活を離れて過ごす特別なときなのです。

弟子たちの集まりも、傍から見れば同じような集団と思われていたのに違いありません。けれども、彼らの口数は少なかったのではないのでしょうか。彼らの巡礼団を率いてくれていた方は、もういらっしやらないからです。彼らをエルサレムまで導いてくださった方は、この地で十字架につけられ、墓に葬られ、三日目にご復活なさいましたが、それから四十日後には天に昇られたのです。使徒たちを新しいリーダーとして歩み始めようとはしていましたが、まだ動き出すことはできていなかったのです。再び迎えた祭りの日、彼らは、家の中で**座っていた**、と言います。家の外には祭りの熱に誘われて浮足立つ人々が溢れる中、彼らは、家の中に留まっていました。

もちろん、彼らは、ただ落ち込んでいたわけではありません。祈っていたのです。熱心に祈っていたのです。一つになって、祈っていました。神に祈っていました。互いに支え合って、祈っていました。

それで十分ではないかとも思います。けれども、彼らには何かが欠けていました。彼ら自身は気づいていなかったかもしれませんが、彼らに欠けているものを、主イエスはご存じでした。それが与えられるのを待つようにと、主イエスはおっしゃられていたのです。聖霊です。聖霊に満たされた者たちの交わりです。自分自身の言葉で互いに挨拶し、語り合うことのできる交わりが、彼らには失われていたのです。

「枯れた骨よ」

ペンテコステの日。それは、わたしたちが互いの交わりの回復を祝う日です。聖霊に満たされた者同士の交わりを喜び祝う日です。

あるいは、こう言ってもよいかもしれません。この日、わたしたちは、互いに「自分の言葉」を取り戻すのです。

それは、寡黙な者が能弁になる、というようなことではありません。控え目な者が自己主張できるようになる、というようなことでもありません。たとえ自分の口で語ることができない者であっても、その人がその人自身であるための「自分の言葉」を与えられた人として、わたしたちの前に立ち上がってくるのです。天からの真っ赤な炎のような舌を与えられた人として。

弟子たちは、そのとき、互いが**霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した**のを見ていました。そこに居合わせた者たちは、**だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて**いるような思いにさせられていました。彼らは、気づかされたのです。自分の目の前にいる一人の人の語ることを、今まで聞いていなかったことを。今までにも聞いていたはずのその人の声が、今は、まったく別人の語ることのようにして響いていることを。その人が、神に命与えられ生かされている者として、その人自身であることを示す語りを、今は聞いていると、彼らは、気づき始めたのです。

わたしたちには、多くの言葉が必要なわけではありません。けれども、互いに「自分の言葉」が必要です。自分にも、相手にも、「自分の言葉」が必要です。一方通行ではなく、互いに必要です。互いに「自分の言葉」を取り戻す必要があるのです。「自分の言葉」を取り戻した者同士の間でだけ、本当の意味での交わりを育むことができるのです。

言葉は、わたしたちの交わりを育むこともできれば、壊すこともできます。無意識に口を衝く言葉で、わたしたちは、どれほど互いの交わりを壊してきてしまったことでしょうか。交わりを絶ち、互いを亡き者のように扱ってきたでしょうか。預言者が告げるような**枯れた骨**の山を、わたしたちは築いてきたのです。けれども、主は言われるのです、「**枯れた骨よ、主の言葉を聞け**」と。「**見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む**」と。四方から吹き来たる主の霊を吹き込まれた者は、わたしたちの目の前で、命を回復するのです。交わりを取り戻すのです。

主に「自分の言葉」を与えられた一人ひとりとして、わたしたちは皆、語り始めることができるでしょう。神に「自分の言葉」を与えられた者として、互いの言葉を聞き合う者とされるでしょう。聖霊は、すでに降り、満たされているのです。目を上げて、わたしたちは、互いのうちにとどまる「**炎のような舌**」を喜び祝うのです。